

2008年11月に開催された研究集会と児童文学講座に参加したスタッフのレポートを掲載します。

### ☆全国公共図書館児童・青少年部門研究集会☆

2008年11月6日から7日の2日間、栃木県宇都宮市で全国公共図書館児童・青少年部門研究集会が開催されました。研究主題は「子どもたちに生きる力と喜びを～読書で拓く未来～」。初日には「人生の脚本は子ども時代に書かれる～本の力、絵本の力～」と題した柳田邦男氏による基調講演と荒川区のYAサービス、浦安市立図書館の乳幼児サービス、宇都宮市立図書館の学校支援サービスの三つの事例発表があり、二日目には日本図書館協会児童青少年委員会委員長の坂部豪氏による「児童サービスの現状と課題」の基調報告の後、前日の事例発表の補足と質疑応答が行われました。

基調講演では限られた時間の中で様々なお話がありましたが、その中でも「読書経験と実体験が結びつくことが重要であり、読書経験が多ければ多いほど後々に何かをもたらす確率が高くなる」との柳田氏の言葉が心に残りました。また、事例発表の「前例がなくても体当たりでチャレンジしてみる」という荒川区、「言葉の体験の場としてのわらべうたの会を図書館で」という浦安市、「学校図書館支援を市立図書館利用につなげたい」という宇都宮市、三者とも試行錯誤しながらも熱意を持って続けてきたサービスが定着してきていることに自信を深めている様子が印象的でした。

子どもたちが生きる力と喜びを手にするために図書館は何をするべきか、何ができるのか、これからの児童サービスのあり方について考えさせられた研究集会でした。

### ☆国際子ども図書館の児童文学講座☆

2008年11月10、11日に国際子ども図書館の児童文学講座が開かれました。

平成20年度の総合テーマは「日本の昔話」。4名の講師（小澤 俊夫、大島 建彦、武田 正、君島久子）によって、昔話の重要性や昔話と子どもとの関係などが話されました。

小澤氏は「昔話の語りの様式」「昔話からのメッセージ」というテーマで昔話の様式とその意味や、昔話に込められたメッセージと子どもの成長について、大島氏の「日本の昔話の展開」では完形昔話（本格昔話）の「一寸法師」を取り上げ多様な変化について話されました。また、武田氏の「昔話の語りの伝承」では昔話と日本人の歴史や生活、信仰との関わりを、君島氏の「日本の昔話のアジア的展望」では日本とアジアでの昔話の類似や多民族国家である中国やアジアでの昔話の意味などについて話されました。

講師の方々が共通して話されていたことは、昔話は人間の可能性や子どもの成長、いのちのあり方、自然との関係について語っており、過去から現代へのメッセージであるということでした。また、昔話が文学的になったり、大人の感性で子どもに押し付けられることにより、昔話の本来の形、つまりは口で語られ、耳で聞くという形が失われつつあることを危惧されていたことが印象的でした。

昔話の語りを聞くということがなくなってきている今、昔話が昔話として残されていくにはどうしたらよいのか、考えさせられる機会となりました。

今回の研究集会や講座への参加は学ぶことの多い充実したものになりました。これからもこのような機会には積極的に参加し、より良いサービスが提供できるように努力してきたいと思います。

